

2023年5月7日（日）主日朝礼拝説教

『風は思いのままに吹く』井上隆晶牧師
テトス3章 1～7節、ヨハネ福音書3章 1～9節

①【どうしたらあなたのようにになれるのですか】

ファリサイ派に属し、国会議員でもある、歳をとったニコデモという人が、ある夜イエス様のもとにやってきました。ファリサイ派というのは律法の教えを忠実に守ろうとするユダヤ教のグループです。彼が夜やって来たのは人目を避けてのことでした。イエス様と親しくする者は社会から追放されることになっていたからです。彼はこういいました。「ラビ（先生という意味）、私どもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、誰も行うことはできないからです。」（2節）「あなたがしている業を見ると、神があなたと共におられるとしか思えません。どうしたらあなたのようにになれるのですか」と彼は尋ねたのです。彼はすでに歳を取っていました。歳を取れば気力もなくなり、いろんなことを諦めます。それなのにこの老人は「どうしたらあなたのようにになれるのですか」と思った、ということに、まず私は驚きを覚えます。彼の中にあつた「聖なる憧れ」は、ザアカイの中にも、放蕩息子の中にもあつたものです。「良くなりたい」「変わりたい」という思いです。ニコデモは私たちに勇気を与えます。人はどんなに歳を取っても変わることが出来る可能性があるという事なのです。

②【新しく生まれる＝新生とは】

それに対してイエス様は「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」（3節）と言われます。彼は新しく生まれるという意味が分かりません。「年を取った者がどうして生まれることができますでしょうか」と答えます。するとイエス様は「はっきり言うておく。誰でも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」（5節）と言われました。「霊」というのは聖霊のことであり、「水と霊とによって生まれる」というのは洗礼を意味しています。パウロは他の手紙の中で「大切なのは、新しく創造されることです。」（ガラテヤ6：15）と言っています。洗礼というのは神によって新しく生まれることであり、新しく創造されることであり、神の業です。

●先日、昔の信仰の友が電話をしてこられ「先生、どうしたら新生できるのですか？」と聞いて来られました。この方は何十年も信仰生活をしているのに、神も救いも分からないというのです。彼女は「変わりたい」と言ったのです。では、「これこれをしなさい、あれをしなさい」と指示すると「あれは嫌だ」「これも嫌だ」

というのです。まことに頑固な自分がその中に住んでいるのです。ああ、これでは無理だなと思いました。

なぜイエス様は「水と霊」によってと言われたのでしょうか。「水」は「死」を意味します。土ではなく水の中で古い自分を葬るのです。そうやって自分というものに死ななければ聖霊は働けないのです。イエス様はニコデモに「あなたは自分の欲望をなくしたり、自分の思いを小さくするような苦行によって、変わろうとしているがそうではないのだ」と言ったのです。よくキリスト教を「心を磨く宗教」だとか「倫理道徳」と思っている人がいますが、まったくの誤解です。古い自分をいくら磨いても意味がありません。磨くのではなく壊すのです。死なないで神の栄光を受けられないかと思っているのが大きな間違いです。

●昔、心なごむ会であるお母さんのお証しを聞きました。その方の息子さんは発達障害でシンナー依存です。友達の気を引くために父親の財布からお金を取って物を買ひ、皆に配っていました。叱ると家を飛び出し、家族が探し回るということを繰り返していました。14歳からシンナーを吸うようになり、30歳まで吸っていました。吸わないのは病院に入院している時だけでした。母親は本人に黙って夜中にこっそりとシンナーの一斗缶を草むらに捨てに行きました。でも捨てたと思ったのに、次の日にはまた一斗缶が部屋にあるのです。塗料屋から盗んでくるのです。タクシーに乗って夜中に帰って来ます。物音で近所の家の窓が開きます。夜中に大声でわめき、近所迷惑になるから母親はタクシー代を払いに行きました。病院に行けば「お母さん、まだそんなことをしてるんですか。」と怒られます。母親は自助グループに休まずに通いました。息子さんは10年間ものすごい数の精神病院に入院し、病院では依存症は治らないというのに気づきます。彼は泣くだけ泣いた時、「生きていいんだよ」という不思議な声を聞きます。彼は「俺は生かされているんだ」という思いに変わりました。それまでは「俺だけがどうしてこんな目に遭うんだ」と文句をいって生きてきましたが、その時から彼は変わりました。本人を見た時、母親は一目で息子が変わったことがわかりました。そして普通の人として見なければいけないという思いに母親も変わりました。「私もあの人も大切な人。私も大切。私を一番大切にしなければならないと思えるようになった。以前は上から目線で息子を見ていた。でもあの人は、あの人なりにいい所がいっぱいあるのに気がついた。息子のことはもう口出ししません。あの人はあの人、自分は自分だ」と腹が立たなくなった。今まで苦しかったが、このことに気づくためだった。」最後にお母さんは面白いことを言っていました。「悲しい悲しいと思っている人は不幸になります。感謝しないとイケません。朝、目が覚めたら、上に住んではる方に祈って、一日精一杯生きる。夜は、また感謝しますと祈る。上にいる人は見てまっせ。」彼らはクリスチャンではありません。でも何と見事に神に出会い、変わったことでしょう。息子さんは今、依存症の回復のために若者のグループを立ち上げ、世界にまで出かけて活動しています。

③【風は思いのままに吹く】

イエス様はニコデモに「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」(8節)と言われました。風は自由に吹き、去ってゆきますが、風が来る前も、去った後も何も変わりません。クリスチャンも同じです。洗礼を受ける前と受けた後とそんなに変わりませんが、聖霊という風が吹くと、新しい人が中に生まれるのです。だから不思議としか言いようがないのですが、新しい人間が古い人間の中に造られた(生まれた)のです。それが「肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である」(3:6)という意味です。そこで一人の人間の中に、肉によって生まれた自然の人と、聖霊によって生まれた神的な人の二つが同時に存在することになります。自然の人は自分の力によって生き、神的な人は神によって生きようとしします。

●イザヤ書にヒゼキヤ王の話が出てきます。38章でヒゼキヤは死ぬことを告げられた時、泣いて神に祈ったので、神から特別の憐れみを受け、15年命を長らえることになりました。39章でバビロンの使者が、ヒゼキヤの全快祝いにやってきました。当時アッシリアという国が支配していて、バビロンとユダの国はアッシリアに対抗するため同盟を結んでいました。ヒゼキヤは喜んで使者を迎え入れ、信頼をもって、国の中のすべての物を見せました。するとイザヤはヒゼキヤに神の言葉を伝えます。「今日まで蓄えてきたものが、ことごとくバビロンに運び去られ、何も残らない日が来る。」(39:6)これを聞いてヒゼキヤは「あなたの告げる神の言葉は有難いものです」といって軽んじました。38章で神に必死に祈ったヒゼキヤと39章の彼とは天地の差があります。どうして彼は変わってしまったのでしょうか。寿命を15年与えられた彼は、自分は神に愛される特別な人だと思って、油断し、神の愛に慣れてしまい、神に求めることを忘れてしまったのです。榎本保郎牧師はこう言っています。「私たちの信仰は自分のものではないからである。私たちの信仰は神のものである。私が努力して得たものであるなら、失うことはない。けれども信仰は神のものを私たちに預けられているだけのものである。…信仰は与えられるものであるから、今日も与えられなければなくなってしまう。だから私たちは毎日、み言葉を求め続けていかなければならないのである。」

私はこれを読んで大いに反省しました。若い時は、必死に神を求めました。何もなかったからです。しかし歳を取るとそんなに必死に求めなくなりました。いろんなものを手に入れたからです。求めなくても自分で得ることが出来ると思いついたのだと思います。そうではありませんでした。私の信仰の宝物庫は空になるころでした。信仰はいつも自分が「空であること」「ゼロであること」が必要なのです。その時、聖霊は自由に吹いて、私を用いて神の業を行って下さるでしょう。